

富士時報 通巻第600号発刊にあたって

*清水 照久(しみず てるひさ)

当社の技術機関誌『富士時報』は、当社設立の翌年、すなわち、大正13年3月に創刊されました。創刊号において当時の社長名取和作は、発刊の辞(全文)で、

「我國は無盡の水力を有し、世界有数の水力電氣國たるの日も追っては到着するの期あるべしと雖も、其學問技術に至ては、乍遺憾歐米の諸國に及ばざること遠く、優良なる機械器具は、多くは之を輸入に俟たざるを得ざる状況なるに鑑み、優秀なる技術を輸入して優良なる製品を作り、輸入を防遏せんが爲に、世界的電氣界の巨擘たるシーメンスハルスケ、シーメンスシュッケルト會社と相提携し、我が富士電機製造株式會社は創立せられたり。而して、獨逸國の最新なる技術と學理とは、我社之れを獲るに至便なるの位置にあるにより、獨り我社之れを專にするの私心を捨て、本冊子に依り定時廣く之を江湖に紹介せんと欲す。讀者若之により利する所あらば幸甚也。」と述べております。

爾來、当社の技術誌として、昭和10年に当社の通信機部門を分離して富士通信機製造株式会社(現、富士通株式会社)を独立せしめた後も、両社共通の機関誌『富士時報』として発行を続けましたが、第二次世界大戦後半の昭和19年3月号をもって終刊となり、国家統制により当時の各メーカー機関誌とともに日本電機製造協会が統括する『電機技術』に統合されたのであります。

終戦後2年を経た昭和22年に『富士時報』は復刊したのであります。その復刊号(昭和22年第1号)で当時の社長和田恒輔は、「富士時報再刊の辞」で、

「終戦以來既に約二ケ年を經過した。そして敗戦の惨めさは各面に露呈され、國民は等しく辛慘を嘗めつゝある。御互は敗土の中から立上って日本を再建せねばならない。……(中略)……然るに、我國の領土は狭少となり、資源は極めて貧弱で工業の振興も容易に企圖し得ないのが實情である。只こゝに一縷の望みは豊富なる勞働力を活用し、卓越せる技術の上に他國の追隨を許さぬ様な工業を創造し以て國民生活の安定を計り、其の水準を向上せしむるにある。然らば現下我國に於ける其技術はどうか、省みると忸怩たるものがある。吾々は今後更に更に研鑽琢磨早く先進各國の水準に追付き世界一流の技術國とならねばならない。當社は、永年電氣機器の製造に従事し、其技術の進歩發達には渾身の努力を傾けて來たが、叙上我國の現状並に將來に鑑み今後は一層之を強化推進したいと思ふ。……(後略)……」と述べております。

昭和22年の復刊以降は、当社の技術機関誌として順調な

発行を続け、その間2回の臨時増刊号を合わせて、本号をもって通巻第600号を数えるに至ったのであります。つまり、私共は、当社創立の直後から、——途中、第二次世界大戦による中断はあったものの——今日まで、一貫して当社の製品を支える技術を「広く江湖に紹介」してきたのであります。当初はドイツ技術が中心でありましたが、当社の歴史そのままに、理論を大切にすドイツ技術を基として育んだ当社独特の技術へと変遷してまいりました。

当社は既に御存知のように、創立以来続いたシーメンス社との全面技術協力の関係に昨年をもって終止符を打ちました。今年からは、従来にも増して独自の技術でお客様の御要望におこたえ致しております。もちろん、富士電機ひとりて孤高を保とうというわけではありません。それぞれの分野で世界で最もふさわしい相手と手をつなぎ、時には技術供与をし、時には技術の提供を受け、時には共同開発をし、時にはOEMで製品供与をし、等々、さまざまな形態でパートナーを得ることも行いながら「卓越した技術」の育成に努めておるのであります。この新しい自立の姿は、「エネルギーとエレクトロニクス」を標榜して技術を培ってきた当社が、これらの分野で世界に誇る幾多のトップ製品、トップ技術を持った結果の自信の証左でもあります。第二次世界大戦後の「富士時報復刊号」で、当時の社長和田恒輔が誓った「卓越せる技術の上に他國の追隨を許さぬ様な工業を創造すること」を実現し、これをもって富士電機自身が更に飛躍せんとする節目に当たる本年、『富士時報』もまた、第600号という節目を迎えたことは、意義深いものがあります。

21世紀へ向けて私共の最大の課題は、人間性の追求であり、それに果たすエレクトロニクス技術の役割は重要であります。また、エネルギー涸渇の時代といわれる21世紀に備えてクリーンな新エネルギー技術を開発、製品化することは急務であります。まさに、当社が標榜している「エネルギーとエレクトロニクス」こそ今後ますます重要性を増すことは必定であり、その技術開発を担う私共の責任はいよいよ重大であると自覚する次第であります。

私共が誠心誠意、全力を傾注して培った技術の成果は、今後共、『富士時報』をはじめとする媒体を通して広く世に開陳する所存であります。引き続き読者諸賢の御批判と御指導を頂ければ幸いに思います。

本号は、第600号を記念して、広く当社が対象とする各分野の最近の代表的技術を御紹介すべく企画しました。併せて御批判頂ければ幸いに思う次第であります。



*本誌に記載されている会社名および製品名は、それぞれの会社が所有する
商標または登録商標である場合があります。